
1981年 夏 彩

辻風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1981年 夏 彩

【Nコード】

N1933M

【作者名】

辻風

【あらすじ】

1981年高校生だった少年少女の物語

きょうもハンバーガー屋さんの前で赤信号を待っていた。
たくさん制服たちが並んでいた。

うちの制服はシンプルで白いカッターシャツに紺のスカートだけだった。

左腕のところに薄い色で英語で校名が入っていた。

この町では、有名な制服だった。私も中学校の頃からあこがれていた。

さっそうと歩く姉さんたちはかつこよく輝いてみえた。

今年からわたしもその一員となった。学校は長崎の高台にあり、学校からは長崎の町が一望できた。

信号がすすめを示した。いつものように、大学病院前の電停を目指してすすみはじめた。

浦上川に架かる橋の中央まで進んだところで、制服の男子高校生が二人が目の前に進んできた。

「こんにちは。僕たちバンドやっているんだけど、今度原楽器でコンサートやるんだ」

背の高い色の黒いひとが声をかけてきた。制服は近くの男子校の生徒だった。

「音楽に興味ありますか。僕たちはアリスのコピーをやっています。ほかにも3つバンドが出ます」

「私、アリス大好きです。お父さんがよく聞いています。いくらなんですか」

思わず私は反応した。

「本当は、500円なんだけど、今日初めての方なので300円でいいよ」

色が黒い目がくりつとした人が背の高い人をチラッとみて答えた。
「いつですか」

「7月26日。夏休みの最初の日曜日」

「ふうん。友達と行こうと2枚ください」

小さい赤い財布から600円出した。

色の黒い男の子は赤いチケットを渡しながら

「500円でいいよ。ありがと。きつとみにきてね」

「7月26日だから。レーテというバンドだよ。一番最後に出るから」

背の高い男の子もニコニコしながらいった。

チケットは手作り感たっぷりだった。

受け取って、また電停をめざした。

男の子たちはほかのうちの制服に声をかけている。

長崎では今高校生バンドがあつい。

どんな演奏をしてくれるのだろう。

もうすぐ5時だというのにまだまだ高く、セミの鳴き声がしていた。

もう梅雨が明け夏が始まるうとしていた。

何かがおおきく変わろうとしているように思えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1933m/>

1981年 夏 彩

2010年10月21日22時43分発行